

令和6年度

上勝中学校
「学力向上実行プラン」

学校の教育目標を踏まえた学力向上の重点目標

○主体的に粘り強く学習に取り組む生徒の育成
○愛のある学校づくりの推進
○教育力の向上と持続可能な学校づくり

学力向上検討委員会構成

学力向上推進員
湯浅 璃緒

委員
校長:大井 育代 教頭:吉本 哲也
教務主任:福崎 泰樹
2年主任:曾我部 裕司 3年主任:福良 毅

校長
大井 育代

【小中連携または中高連携における共通の取組】

小中9年間を見通し、指導の一貫性をもたせた教育活動

【各校の取組状況の把握について】

管理職による授業参観や教員からの報告等、様々な機会を捉え、取組状況の把握を行う。

○次の（１）～（３）をバランスよく取り組み、学力の向上を推進

(1)知識・技能の習得

児童生徒の状況(○よさ・●課題)	具体的目標(目指す子供の姿)	具体的方策(教員の取組)	中間期の見直し	達成状況(評価)	次年度における改善事項
○全般的に素直で前向きで、何事にも真面目に取り組むことができる。 ●実力テストなどの出題範囲が広いテストでは、単元末テスト(令和4年度から実施)と比べ正答率が下がる。	・授業に主体的に取り組み、基礎的・基本的な知識・技能を習得することができる。 ・知識・技能の定着を図るため、家庭学習及びテスト前の学習に計画的に取り組むことができる。	・単元末テスト前に対策プリントを配布するなど、目標未達の生徒の固定化やモチベーションの低下を改善するためにも単元末テストのより効果的な実施方法について考え、全ての生徒の学力向上を図ることに努める。 ・実力テスト前に部活動休止期間を設定し、計画的に学習に取り組む環境を作る。そのためにも、担任や各教科担任が家庭学習の仕方等を指導する時間を設ける。	特になし	○生徒が、単元末テストに向けて意欲的・計画的に学習に取り組むことによって、知識・技能の習得につながり、学力として定着していった。 ○基礎学力テストでは、過去の問題を解いていくことで、知識・技能の習得が図れた。	○単元末テストはテスト範囲が単元ごとなので、ワーク類が利用しやすく生徒が勉強しやすい。そのため生徒が計画を立てて学ぶことができるので、次年度も継続して実施した方がよい。 ○実力テストを実施することで、客観的な学力が計測でき達成度がわかるので、来年度も10回程度実施した方がよい。

(2)思考力・判断力・表現力等の育成

児童生徒の状況(○よさ・●課題)	具体的目標(目指す子供の姿)	具体的方策(教員の取組)	中間期の見直し	達成状況(評価)	次年度における改善事項
○授業中に進んで発表し、課題に対して真面目に取り組むことができる。 ●思考力や長文での記述を必要とする問題では、他の問題と比べ正答率が下がる。	・自分の考えを、根拠や理由を明確にしながら説明したり書いたりして伝えることができる。 ・各授業における課題に対する話し合い活動を通して、解決する方法を考えることができる。	・生徒がより意欲的に取り組めるよう、課題設定の工夫やワークシートの工夫に努める。 ・授業づくりや学習指導方法、ICTの活用についてなどの校内研修の活性化を図り、教職員の技術力向上に努める。 ・学校生活の中で、各学年の生徒が大人数の前で発表できる場面を設定する。 ・新聞を活用した取組や作品の応募を通して、表現する機会を増やす。	特になし	○年に10回程度実力テストを行うことにより、思考力が向上している。 ○ICTの積極的な活用に伴い、生徒の課題解決に向かう情報収集・分析能力が育ち、判断力も向上してきた。 ○話し合い活動を通して、他者の意見や考えに触れる機会を多く設けることで、思考力・判断力・表現力が育まれていった。	○現代的な諸課題の解決につながるような課題設定の工夫をし、考えを深めさせる。 ○各教科等でICTを工夫活用し、思考力・判断力・表現力等を育てていく。 ○他校の生徒や外部講師、地域人材との交流の場を多く経験させることにより、自分の考えや思いを、目的や状況、対象に合わせて表現していくことができるようにする。

(3)主体的に学習に取り組む態度の育成

児童生徒の状況(○よさ・●課題)	具体的目標(目指す子供の姿)	具体的方策(教員の取組)	中間期の見直し	達成状況(評価)	次年度における改善事項
○ノーチャイム着席、朝の自習、エクストラスタディーズなど、基本的な学習規律を守って学習に取り組むことができる。 ●課題に対して自らの学習を調整したり、粘り強い取組を行おうとしたりすることが難しい。 ●生活の乱れが目立つなど、学習サイクルの確立ができていない生徒もいる。	・各教科の学習に主体的・対話的に取り組み、深い学びを実現することができる。 ・自分の学習の状況をしっかりと振り返り、自らの課題を解決できるよう計画を立て、実践することができる。	・家庭との連携を図りながら生活リズムの確立や時間の使い方、自主学習の仕方等の指導を行う。 ・「授業のめあて」「学習の流れ」「学習のまとめ」を提示し、生徒に振り返りをさせる習慣をつけさせる。 ・学校力コラボレーション事業を活用し、授業づくりについての研修を進める。 ・学習サイクルを確立するように、単元末テストに向けた家庭学習を行うように支援する(提出物の提出率90%以上)。また、十分な自主学習の時間を設けるためにも、自主学習の内容を各教科の提出物で代用可とし、生徒の負担軽減を図る。	特になし	○単元末テストに対する意識が向上し、自ら目標を設定するなど、積極的に学習に取り組む姿が見られた。 ○疑問点や不明な点などを友達に尋ねて教えてもらうなど、集団として学習に取り組む姿勢が見られた。 ○学校力向上コラボレーション事業、GXスクール、出前授業を活用することで、主体性が育ってきた。	○さらに主体的に学習に取り組めるよう、次年度も学校力向上コラボレーション事業、GXスクール、出前授業を活用する。 ○ほとんどの生徒が提出物を出せるようになってきているが、100%ではないので、引き続き家庭学習の仕方等の指導を行う。

